闊達な愚者

相互性のなかの主体

竹内成明

れんが書房新社

闊達な愚者

相互性のなかの主体

竹内成明

れんが書房新社

竹内成明（たけうち　しげあき）
1933年大阪市生れ
1957年京都大学文学部卒業
現　在　同志社大学文学部教員
現住所　京都市左京区北白川下別当町123
著訳書　『戦後思想への視角』（筑摩書房）
　　　　G・フリードマン『力と知恵　上・下』（共訳＝人文書院）他

闊達（かったつ）な愚者——相互性のなかの主体——

1980年11月10日　初版第一刷発行　　定価 1800 円
＊
著　者＊竹内成明
装幀者＊小林久太郎
発行者＊鈴木誠
発行所＊れんが書房新社
東京都新宿区三栄町10　日鉄四谷コーポ
電話03-358-7531　振替東京7- 30349
印刷所＊文昇堂(活版)＋東光印刷所(平版)
製本所＊古賀製本
©1980 Shigeaki Takeuchi＊0030-800527-9114

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

閑道な愚者・目　次

闊達な愚者――序にかえて―― 8
一 「もうひとりのドン・キホーテ」 8
二 悪魔と弥次馬 14
三 あいまいな存在 18
四 媒介の相互性 24
五 「仲介の世界」 35
六 旅立つ者たち 48

I

関わりと離脱――内面のメディア―― 57
一 メディアのあいまいさ 57
二 「わたし」のなかのメディア 64
三 ある反逆と挫折 72
四 巫女と複製 80
五 逸脱の自由 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅱ　実践と戯れ――内側からの変革――　94
一　「思う」と「考える」　96
二　歴史を「作る」主体　104
三　「成る」と社会関係　112
四　歴史を「生む」関係　118
五　「戯れ」がはらむもの　125
Ⅲ　生きている理性――「委員会の論理」再考　その一――　132
一　状況と課題　132
二　二つの主体性　143
三　歴史のなかの論理　153
四　コミュニケーションの傾向性　161
Ⅳ　集団的主体と疎外――「委員会の論理」再考　その二――　177

一　集団の主体性　180
二　集団の論理　184
三　論理の自己疎外　190
四　表現の自己疎外　194
五　意味連関への問い　199

V　批判的相互行為の可能性──「委員会の論理」再考　その三──　207

一　コミュニケーション論の盲点　207
二　労働と相互行為　213
三　批判的相互行為　220
四　異化の共存　229
五　新たな関係性へむけて　237

ユーモアとイロニー──結びにかえて──　243

あとがき　265

闊達な愚者

相互性のなかの主体

竹内成明

れんが書房新社

間違な患者＊目次

闊達な愚者——序にかえて—— 8
一 「もうひとりのドン・キホーテ」 8
二 悪魔と弥次馬 14
三 あいまいな存在 18
四 媒介の相互性 24
五 「仲介の世界」 35
六 旅立つ者たち 48

I

関わりと離脱——内面のメディア—— 57
一 メディアのあいまいさ 57
二 「わたし」のなかのメディア 64
三 ある反逆と挫折 72
四 巫女と複製 80
五 逸脱の自由 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅱ　実践と戯れ――内側からの変革――　94
一　「思う」と「考える」　96
二　歴史を「作る」主体　104
三　「成る」と社会関係　112
四　歴史を「生む」関係　118
五　「戯れ」がはらむもの　125
Ⅲ　生きている理性――「委員会の論理」再考　その一――　132
一　状況と課題　132
二　二つの主体性　143
三　歴史のなかの論理　153
四　コミュニケーションの傾向性　161
Ⅳ　集団的主体と疎外――「委員会の論理」再考　その二――　177

一　集団の主体性　180
二　集団の論理　184
三　論理の自己疎外　190
四　表現の自己疎外　194
五　意味連関への問い　199

V

批判的相互行為の可能性——「委員会の論理」再考　その三——　207

一　コミュニケーション論の盲点　207
二　労働と相互行為　213
三　批判的相互行為　220
四　異化の共存　229
五　新たな関係性へむけて　237

ユーモアとイロニー——結びにかえて——　243

あとがき　265

闊達な愚者

——相互性のなかの主体——

闊達な愚者
――序にかえて――

一 「もうひとりのドン・キホーテ」

ドン・キホーテが面白いのは、多分、風車にぶっとばされるからではあるまい。なるほど、風車を「巨人」と思いこみ、無謀にも槍で立ち向かい、ロシナンテもろとも地面に叩きつけられる様は滑稽だし、教訓にも満ちている。現実を無視するな、現実に学びなさいという教訓だ。けれども、教訓になる滑稽さは、ほんとうは悲しい。見せしめになる者の悲しさ……ばかりでもない。地面に叩きつけられても、ドン・キホーテにとっては、風車はやはり「巨人」であるからだ。

「憂い顔の騎士」ドン・キホーテは、だから悲しい。その悲しさを知ることができるのは、彼と同じように夢を求めて、旅立つ勇気のある者だけだろう。池田浩士の「もうひとりのドン・キホーテ」は、そのことを雄弁に語ってくれる（『ルカーチとこの時代』平凡社）。夢を求めて、何ごとかにからだごとぶつかっていくのは、ドン・キホーテのような年寄りよりも、むしろ若者のほうがふさわしい。理

想を求め、生きがいを求めて、若者たちはまっすぐに現実世界に立ちむかい、そして大人たちの世界、現実の世界にはねかえされて、挫折する。そのときドン・キホーテの滑稽さは、若者たちにとっては自分を照らす鏡になる。滑稽なドン・キホーテが、「現実にたちむかうわれわれ自身の行動の問題、現実変革の試みにおける敗北と悲惨の問題を体現する人物」として、立ちあらわれてくるわけだ。池田によれば、ブロッホのドン・キホーテ論は、そういった若者の「夢と直接的な行動とその破綻とを、対象化しようとする試み」であった。

むろん現代の若者たちは、ドン・キホーテそのままではない。ドン・キホーテの滑稽さには、「われわれ」の滑稽さにみられるような「屈折した暗さ」がない。ドン・キホーテは単純に怒り狂う。彼にはまだ、夢と現実との分裂の自覚がなく、「自我と世界との分離の意識、あの不幸な意識」がなかった。近代のはじめ、自我に目覚めたロマン派の若者たちも、因襲にみちた現実世界に反抗し、そして挫折した。外の世界にはねつけられた彼らは、彼らの自我そのものに価値を求め、ひたすら内面の世界にふみこんでいく。けれども、そこに待ちうけていたのは幻滅であり、絶望であった。世界から離脱してしまった自我の内部には、もはや希望はない。

とすれば、世界から離脱した自我をもって、その世界といかに関わっていけばよいか。夢をいだきながらもどうしようもなく、うっ屈した思いをもって、だまって大人の世界に加わるか。それとも夢は夢ということにしておいて、現実と適当に付きあう方法を考えるか。現実にのめりこむこともなく、夢にのめりこむこともなく、つかず離れず、適当に折れあっていく。そこにしか残された道はな

いのだろうか。

だが、夢をもつこと、その夢の実現にむかって行動することに、非難されるべき点は少しもないはずだ、とブロッホはいう。夢と現実を切り離すのではなく、問題は、夢とその行動に「充分な耳ざとさと、強さと、責任と、根底と」を与えること、破綻を教訓として現実のなかに根拠をおろすことができるかどうかにあるはずである。夢を求める行動が現実を前にして破綻するのは、現実のほうが強くて、夢とその行動が弱いからである。どうすれば夢と行動のほうを強くすることができるか。失敗に学ぶことである。失敗を通じて、自分自身を強めること、自分自身の足もとをかため、その上にしっかりと立つことである。夢とその行動が、そのように、失敗に媒介された実践としてあらわれるとき、そこに現実変革の可能性が生まれてくる。

そこで、現実に学ぶことを知っていたファウストの行動的叡知が、ドン・キホーテの理想主義に対置される。とはいえ現実に学ぶことが、現実に妥協し、そこに埋没することになっては何にもならない。かつてのドン・キホーテのように失敗をくりかえすだけの不毛な行動者であることをやめるだけでは、十分ではない。行動者であることをやめるのではなく、その行動者が、現実に従っている賢い人たちに、「さらに深い賢明さとさらなる行動を強いる主体」、ほんとうの賢明さを身をもって教えることのできる主体に、生まれかわることが必要である。行動の破綻に学び、そこから得た賢さでもって、現実主義的な賢さを越えて行動すること、そしてその行動を通じて、現実に埋没している人びとの目を覚ますことができるようにならねばならない。単純な夢見る行動者であるドン・キホーテか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com